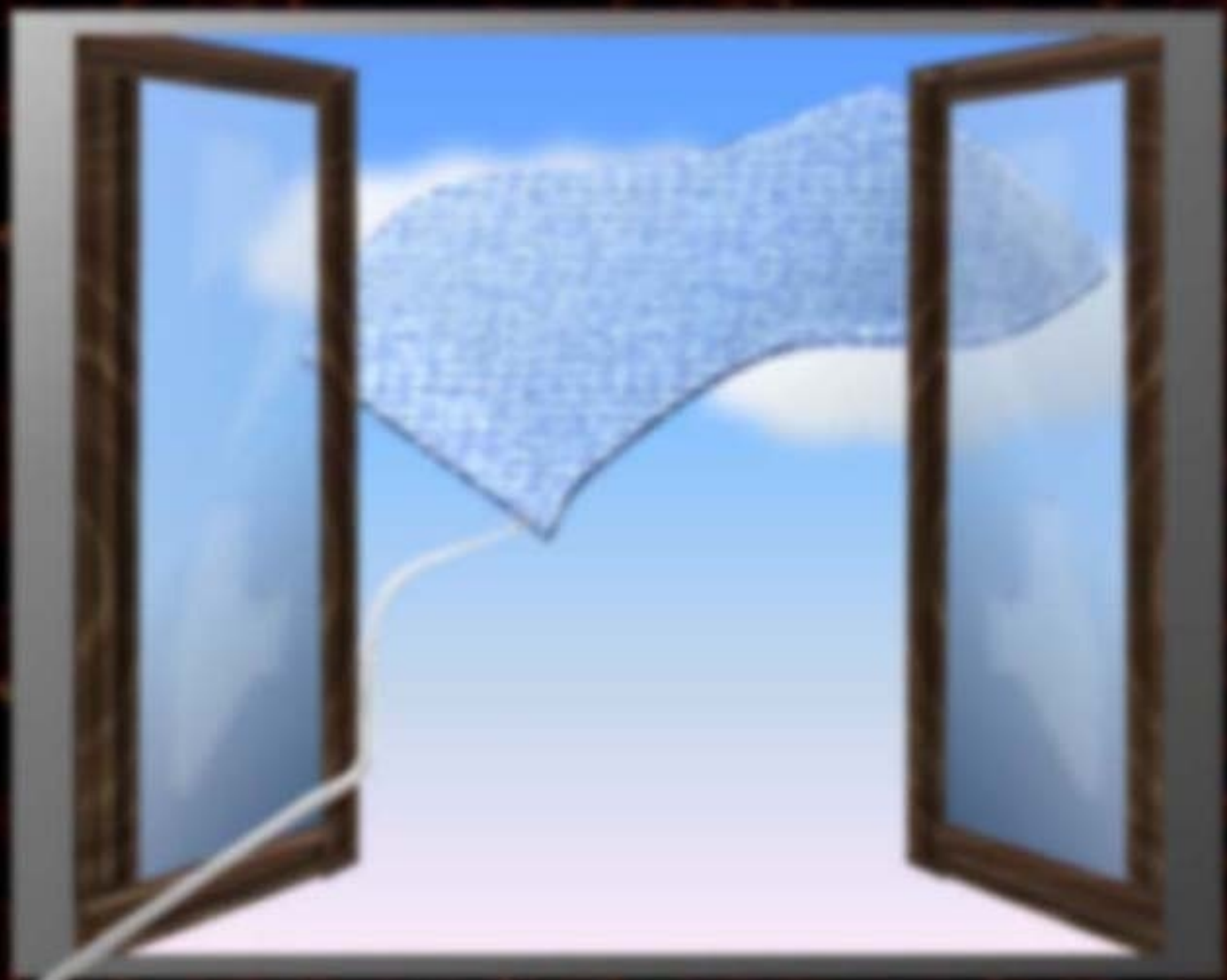


週刊

夢の窓

No.7



むうにい

新しくできたパン屋

近所にパン工房がオープンしたので、さっそく行ってみた。

フランスパンや食パンなど、どこにでもあるようなパンと並んで、珍しいパンが置いてある。「スルメパン？」わたしは思わず、口に出してそう言った。ナンのように平べったいパンだった。「よろしかったら、試食をどうぞ」店員がスルメパンを少しちぎってくれた。「あ、いただきます……」

スルメパンは、紛れもなくスルメの味がした。それどころか、本物のスメルのように、なかなか噛みきれない。

「お客様、スルメパンは噛んで味わうものではないんですよ」店員が丁寧に説明してくれた。「ちゅうちゅうとしゃぶってお召しあがりください」

なるほど、それでこそスルメパンだ、とわたしは納得した。しゃぶればしゃぶるほど、味が染みてくる。

店員は別の棚のパンも勧めた。

「こちらのパンも、今たいへんに評判をいただいています」

玄武岩がごろごろと置かれているようにしか見えなかった。その名も「岩石パン」。

「これ、本当に食べられるんですか？」わたしは疑った。

「もちろんです。少々お待ちください……」そう言い置くと、店員は店の奥へと入っていった。

しばらくして戻ってくると、手にはのみとハンマーが握られている。

「ささ、これでパンを削り取ってお召し上がりください」

わたしは言われた通り、岩石パンにのみをあてがい、ガンガンとハンマーで叩いた。石片そっくりな欠けらがぼろぼろとこぼれる。

適当な大きさの欠けらを1つつまんで、口に入れてみた。やはり、小石のように固い。なんとか噛みくたいてみたけれど、奥歯でじゃりじゃりとして、ひどくいやな食感がした。

「歯が丈夫な人にはいいかもしれませんがね」わたしは、当たり障りのない感想を述べた。しかし、内心では（好評って、いったい誰が）などと首を傾げる。

さらに店内を歩いて回ると、他にも聞いたことのないパンが続々と見つかった。

「この『ジャ・パン』って、もしかすると、日本地図の形をしているからですか？」こんがり焦げ目のついたパンは、九州、四国、本州、北海道の全てが陸続きになっていた。ただし、北方領土の部分はすっぽりと抜けている。

「ええ、まあ、そんなところですよ。北の四島につきましては、現在、材料切れのため欠けてしまっていますが」

「ロシアの風当たりが関係しているんじゃないんですか？」とわたし。

「いえいえ、決してそのようなことは……」なんとも歯切れが悪い。

「アンマンパン」というパンは、一見すると普通のアンぱんだった。
「これって、ただのアンぱん……ですよっ」わたしが尋ねると、店員はぱあっと目を輝かせて、
「いいえ、お客様。これぞ、当店自慢のオリジナル・パンなんですよ。いいですか、ご覧下さい」そう
言うと、アンマンパンを取って、ポクッと半分に割ってみせる。
中は2層になっていて、中華まんがまるごと1個入っていた。

そんなものが売れるとはとうてい思えなかった。けれど、店員があまり嬉しそうに話すものだから、
そうとは言えず、
「あ、えーと……。他にもニクマンパンとかピザマンパンなんていうのも、いいかもしれませんね」と
同調してみせた。もちろん、本心などではない。

「ニクマンパン！ ピザマンパン！」店員が叫んだ。今にも踊り出さんばかりのテンションだ。「あり
ます、ありますっ！ ほら、あちらの棚にどっさり！」
「うわ、あるんですかっ?!」提案した以上、買わないわけにもいかない。「すみません、じゃあ、そ
れを5個ずつ下さい……」

釣り船にて

釣り船の上で、のんびりと揺られている。四方を見渡しても、岸どころか島影すら見えない。それでも不安を感じないのは、自分1人きりではなかったからだ。

船首近くには、阿部寛と作曲家の富田勲が肩を並べて座っている。

「わたし釣る人、あなたさばく人」などと、阿部寛は鼻歌交じりに唄っていた。

「ボクはさばく人ですか。あはは」富田勲は屈託のない笑顔で言う。「そういえばね、前にモーグIIIのそばに、買ってきたばかりのサンマを1山置いといたら、電磁波で勝手に焼けていましたよ」

「へー、昔のシンセサイザーっていうのは大したものですね」

釣り糸がぴーんと張った。

「おっ、来た来たっ！」阿部寛は手早くリールをたぐる。釣れたのは体長40センチばかりの平たい魚だった。

「おや、マンボウですか。だいぶ小さいほうですな」

「どうします、これ。返しちまいますか？」

「いや、マンボウもけっこういけますよ。鍋が最高なんだろうけど、あいにくここは船の上。刺身にでもしましょう。なんせ、ボクはさばく人ですからなあ」

富田勲はマンボウを3枚におろし、這い回る寄生虫を1匹、1匹、ていねいにつまみでは海へと投げ捨てる。

「マンボウはムシが多くてやっかいなんですわ」

「富田さん、調理もうまいですね。芸術的な包丁さばきというか、なんというか」阿部寛は感心しながら眺め続ける。

気をよくしたのか、富田勲は包丁でトントンとリズムを刻みながら、「きょうの料理」のテーマ曲を口ずさみ出す。

阿部寛は紙の皿を3つ並べ、マンボウの刺身を盛り付けていく。

「むうにい君、さあさあ、こっちへ来ていただきますしょう」

「あ、はい」わたしは2人のそばに腰を下ろした。富田勲はなおも、自作のあの曲を楽しげに歌っている。

「いい曲だよなあ、この『きょうの料理』って」と阿部寛。「お袋がよくこの番組を見ながら、料理を作ってくれたもんですよ。ああ、なんだか思い出しちゃったな」

「富田さんのこの曲と、『キューピー3分間クッキング』の曲とが、よく頭の中でごっちゃになっちゃうんです」わたしは言った。

うんうん、と阿部寛はうなずいてみせる。「どっちも料理番組だしね」

富田勲は歌うのを止めて、

「まあ、あっちはイエッセルという人のクラシック音楽が元なんだけどねえ」と言った。

わたしたちはマンボウの刺身をもくもくと食べた。見かけからして大味かと思ったが、案外、淡泊でうまかった。これでしょう油など持ってきていたら言うことなしだ。

船はいつの間にか流されていたらしく、遠くの方に栈橋が見えていた。

「あそこに立って、こちらに手を振っているのは誰だろうか？」阿部寛が目の上に手をかざす。「うん、どうやら女の人のようにだけだ」

「もっと寄せないとわからないねえ」富田勲がつぶやく。すると船はまるで、言葉を解したかのように、だんだんと栈橋へ近づいていった。

「ああ、あの人はもしかして、阿部さんと『TRICK』で共演した……」富田勲が記憶をたぐるように言い掛ける。

「仲間由紀恵さんですか？ いやあ、雰囲気は似ているけれど、彼女じゃありませんね」

わたしもじっくりと観察を続けた。栈橋へと近づくにつれ、顔形が次第にはっきりとしてくる。

すらっとして背が高く、短めの黒いスカートに白いブラウス。髪を片側で結って、赤いぼんぼんを付けていた。

わたしは、はっと気づいた。

「あの、じゃリン子チエですよ。ほら、大阪でホルモン屋をやっていて、小鉄っていうネコを飼っている」

阿部寛と富田勲は、ほとんど同時に、「ああっ！」と声を漏らした。

「あんなにキレイになって……もう、じゃリン子とは呼べないなあ」阿部寛が言った。

「チエちゃんは、いまもあの場所でホルモンを焼いてるのかな？」富田勲が誰にともなく尋ねた。

「聞いた話ですと、全国チェーンのホルモン専門店として、大成功を収めたらしいですよ」わたしは言ったが、誰に聞いたのかを思い出せなかった。

「そりゃあ、大したもんだねえ」富田勲が感心する。「全国展開しているんなら、ボクも知っている店かもしれないなあ」

「『じゃリン子チェーン・ホルモン』っていう名前ですよ」わたしが答えると、

「それ名づけたのって、おおかた鉄か、鉄の母親に間違いないだろうな」阿部寛は、そう断言するのだった。

電車の切符

田端駅の改札を出ようとする、
「ピンポン、係員にお知らせ下さい」とアラームが鳴った。
すぐに駅員が飛んできて、
「お客さん、料金が不足していますよ」と言う。
「あ、すみません。うっかりしてました」わたしは精算機で追加料金を支払った。

もう1度自動改札に切符を入れると、
「ピンポン、係員にお知らせ下さい」
また、駅員がやって来る。

「ちゃんと、不足分のお金を支払ったんですよ……」わたしはおどおどと説明する。
「あー、今度は料金が多すぎましたね。こりゃあ、もっと電車に乗ってもらわなくては」
「えっ、ここで降りたいんですけど」
「ダメです。そういう規則になっていますから」とまるで、融通が利かない。

わたしは仕方がなく、電車に乗り込んだ。
切符を確かめてみると、池袋まで乗らなくてはならなかった。そこでいったん下車し、再度、反対回りの電車で戻ってこなくてはならない。
まったく面倒なことだった。

乗車の際、わたしは「山手線」であることを確かめて乗ったはずである。ところが、次の停車駅は「駒込」ではなく、なぜか「駿河湾」だった。
「そんなばかなっ……」東京のど真ん中から、いきなり静岡まで来てしまった。
駅看板で次の駅を見ると「ずんどこ」となっている。東京からどれだけ遠かろうと、「駿河湾」なら、とりあえず場所はわかる。ところが、「ずんどこ」とはどこなのか、見当もつかない。
わたしはひどく不安になった。

いっそ、ここ「駿河湾」で降りてしまおうか、とも考えた。けれど、ホームは周囲をぐるりと海で囲まれて、港ははるか彼方に霞んでいる。おまけに、この小さな駅には人の気配すらなかった。
こんなところで、いつ来るかもわからない次の電車を待つなど、怖ろしくてたまらない。
「ずんどこ」がここよりましであることを期待して、もう少し乗り続けることにした。

「ずんどこ」駅に着いた。ずいぶんと山深い場所である。数年前に廃線になったローカル線、そう言われても素直にうなずいてしまいそうだ。
世の中には「わびれマニア」というのがあるそうだが、彼らならこの景観の素晴らしさが理解できるに違いない。
「ここで夜を迎えることになったら、熊や野犬とパーティを開くことになりそうだなあ」ぶるっと首を振る。

わたしはシートに座り直した。

次の駅は、どこだかさっぱりわからなかった。というのも、窓の外を、濃い霧がおおっていたからである。

霧は全てを白く包み込み、カンテラらしいぼんやりとした光ばかりが、滲むように差してくる。「たぶん、だけど」わたしはつぶやいた。「あの霧の中には、邪悪な怪物が潜んでいるんだろうな。好奇心に負けて探索に行った者を、頭からボリボリと食べてしまうんだよ、きっと」

最後に停車した駅は、なんと「池袋」だった。人混みの作る喧噪が、この時ばかりは懐かしくも心地よく感じられた。

わたしは電車を降り、改札へと向かう。

自動改札機に、少し緊張しながら切符を挿入した。

「ピンポン、係員にお知らせ下さい！」

すぐさま、駅員が現れた。

「お客様、本日はご乗車ありがとうございました」ぺこりと頭を下げる。「山手線に乗車された方は、丸ノ内線もご利用なさっています。他にも有楽町線などがお勧めです」

わたしはどちらも断った。

この次は「アマゾン」にでも停車しそうな気がしたからである。

過去の住むマンモス団地

ある晩、友人の桑田孝夫とマンモス団地へ出かけた。

敷地はぐるりと高い塀が取り囲んでいる。あまりにも高くて、外からは中の様子がまるでわからない。「守衛はあそこだな」と桑田が言った。塀の一部を穿ったような、小さな門があり、その内側から黄ばんだ光がこぼれている。

「行きますか」わたしたちは門へと向かった。

「今晚は」桑田は固く閉ざされた門の鉄格子越しから呼びかけた。

詰め所に座る制服姿の老人が顔をあげる。

「入るのかね？」

わたしと桑田は黙ってうなずいた。門が面倒くさそうに、ゆっくりと開く。

「中は広いんでな。道に迷わんようにしておくれ」老人は注意した。

まるで高層ビルのような団地が、整然と並んでいる。

「何階まであるんだ、ここは」桑田が見上げる。わたしはざっと目で追ってみたが、30階ばかり数えたところであきらめた。というのも、それより上は暗い上に、ねっとりまとわりつくような霧が立ち込めていたからである。

「案外、大気圏まで続いていたりしてね」わたしは言った。あながち、間違いではないような気がした。

どの棟もたいそう古かった。外壁は風雨に浸食され、窓という窓のガラスはすっかり曇っている。電灯の光さえ、ほとんど外に漏れ出してこない。

「この団地、絶対、1億年以上経ってると思うな」わたしがつぶやくと、

「築1億年、最寄りの駅から徒歩30時間……といったところかね」そう、桑田がおどけてみせる。「早く探そうぜ。夜が明ける前にな」

わたし達は「過去の自分」に会うため、ここへやって来たのだった。この途方もなく古くて巨大な団地には、全ての人の過去が住んでいる。

桑田とわたしは、どうしても聞きたいことがあった。

「あの比較的新しい建物じゃない？」わたしは指差した。色褪せたベージュの棟だった。

「行ってみよう」桑田がうなずく。

エントランスを抜けた先にエレベーターがあった。ボタンを押すと、ものの数秒としないうちに降りてくる。

「なんせ、古いからな。途中でワイヤーがぶった切れちまうかもな」桑田が冗談めかして脅す。

「そうになったら、過去の自分たちに花でも手向けてもらうとしようよ」

エレベーターに乗り込むと、わたしは当てずっぽうに階のボタンを押す。

「なあ、むうにい。お前、今『37』を押したろ？ それって、見当を付けてのことか」桑田が聞いてきた。

「ぜんぜん。ていうか、何階に行けばいいのかわからないしね」

「まあ、そうだな。いいや、別に。37階からまず探してみよう。直感が当たるってこともあるかもしれないしな」

37階で降りる。廊下はどこまでも続いていて、目を細めても突き当たりが見えない。

2人で、表札を1つ1つ見て歩いた。

「ピンゴっ！」桑田が叫んだ。「あったぞ、ここだ」

表札には「桑田孝夫の過去」と書かれている。

「おー、おめでとう。やったね」わたしは桑田の背中を叩いて祝福をした。

桑田がチャイムを鳴らすと、奥のほうから「はい」と声がした。

ロックを外す音がし、ドアが開く。玄関から顔を出したのは、小学生くらいの桑田だった。

「あの一、どちら様ですか？」過去の桑田は、あどけない顔を向けて尋ねる。

「あ、おれ、いや、ぼくは『現在』の君なんだけど、ちょっと聞きたいことがあってさ」桑田は腰をかがめて、過去の自分に話しかけた。いつになく真剣な表情だった。

「聞きたいこと？ なあに？」過去の桑田は小首を傾げて見つめ返す。

こほん、と軽く咳払いをすると、勇気を振る絞るようにして、桑田は言った。
「大人になったら、なりたいものがあつたよね。それって、何だっけ。歌手だったかな、レーザーだ
つたっけ。それとも、映画監督だった？」
小学生の桑田は「ううん」と首を振り、桑田の耳に両手を当てて、ひそひそと答えた。
ふんふん、とうなずきながら聞いていたが、次第に驚きを含んだ、明るい表情へと変わっていく。

「そうか、そうだった。うんうん、そうだよっ。おれ、今までなんで、そのことを忘れてしまつてたん
だろうっ！」

わたしはその場を後にした。

さあ、今度はわたしの「過去」を探しに行かなくては。聞きたいことは山ほどもあるのだ。

神田川にシロナガスクジラ現る！

お茶の水の喫茶店でチーズ・ケーキを食べ、ブレンドを飲み終わった後、このまま帰ってしまうのがもの足りず、辺りをふらっと歩いてみることにした。

聖橋に差し掛かると、人が大勢集まり、何やら騒いでいる。

「どうかしたんですか？」近くにいた人をつかまえて尋ねた。

「シロナガスクジラが迷い込んできたんだよ」

橋の下を見ると、なるほど、シロナガスクジラがぷかぷかと波間に揺れている。

頭をこちらに向けているので、しっぽはおそらく、万世橋の辺りで川面を打ちつけているのだろう。大きいとは聞いていたが、目の当たりにするとまるで怪物だ。

「誰か、エイブラハム船長を呼んでこいっ」そう叫ぶ者があった。

「船長なら、神保町で脂の乗った生ハムを喰らいすぎて、今頃はぐっすり眠っちゃってるさ」別の声が応える。

「とっとと起こしてきやがれっ！」罵声が飛ぶ。

「そいつは無理だ。眠っちゃった船長は、氷山のように起きやしねえ。ひとりでに目が醒めるのを待つしかねえぜ」

それにしても、どこから入ってきたのだろう。ここから海に近いといえば、東京湾だ。隅田川を泳ぎ、両国から神田川へと侵入してきたというのか。

これだけの巨体だ。途中で引っ掛かるか、誰かに発見されるかしなかったのかなあ。

男が息せき切って、ばたばたと駆けてきた。いかにも人のよさそうな青年だ。

「こちらでシロナガスクジラが見つかったって聞いたもんで、急いでやって来ました」青年は、ぜえぜえと喘ぎながら言う。

「おうっ、聖橋から下をのぞいてみな。今もそこにいるぜ」

「はあはあ……。あ〜、いますねえ。います、います」

「おめえさん、そんなに探すような真似をしなくたって、嫌でも目にへえるじゃねえか。それともなにかい、その顔についてるのは、節穴かい？」

青年は、観衆に向かいなおった。

「ぼくはですね、ふだんはこの近所でニートをしていて、『働いたら負けかな』とか思っているんですが、今日ばかりは皆さんのお役に立てたらと思ひまして、馳せ参じたというわけなんです」

「で、どうなんだ。何か策でもあるってのかい？」

「あります、あります」そう言って、ポケットから食卓塩の小瓶を取り出す。「こいつで全てを解決してみましよう」

「なんでえ、なんでえ。ただの塩じゃねえか。塩もみでも食うのかよ」

人々の野次には答えず、小瓶を橋の下にサッサッと振った。塩はシロナガスクジラの上に降り注がれ

、見る見るうちに縮んでいく。

おおっ！ と歓声上がる。

「そうかっ、クジラに塩をかけりゃあ、おめえ、水分を吸われて縮んじゃうっつう理屈だな！ よく考えついたな、兄ちゃん。えらいつ、えらいぞっ！」

さっきまで馬鹿にしていた連中も、やんやとはやした。げんきんなものである。

シロナガスクジラは手の平に載るほど小さくなって、駆けつけた警官に引き渡された。湾に寄って、海へと帰されるという。

わたしは心と疑問に思い、青年に聞いてみる。

「海も塩水ですが、さらに縮んだりはしないんですか？」

彼は答えた。

「ええ、それは平気です。塩水と塩をじかに振るのとでは、訳が違いますから」

なるほどなあ、とわたしは納得した。そういえば、スイカは塩水につけて食べたりはしないもんな。

神保町の方角から、眠気まなこのエイブラハム船長がのんきに歩いてくる。

「クジラはどこだあっ？」彼は大声で怒鳴った。

「おめえさんの出る幕はもうないよっ」

そう、誰かが怒鳴り返す。

タクシーで羽田に向かう

わたしはかなり焦っていた。1分でも早く、羽田に行かなくてはならないのだ。
いったんは駅に向かったものの、電車の発車時間を見て、とても間に合わないと思い直す。
わたしは駅前のロータリーへと走り、タクシーに飛び乗った。

「どちらまで？」と運転手。

「羽田まで、大至急お願いします」

「東京から羽田までだと、だいぶ掛かりますよ。時間もお金も」

「電車よりはだいぶ速いでしょう？ あと、こちらの懐具合のことまで、お気遣いはけっこうですから」わたしは言った。

運転手はカチッとメーターを上げると、

「わかりました。じゃあ、参りましょうか」

大通りまで出て、もよりのインター・チェンジから首都高に入る。だいぶ空いていて、タクシーは気持ちよく飛ばしていく。

「この分なら、1時間も掛からずに着いちゃいますね」運転手は機嫌良く話し掛けてきた。

「そうですか。よかった」わたしもほっとする。

シートにもたれながら、（そういえば、何でそんなに急いでるんだろう）と考えた。羽田といえば空港くらいしか思いつかない。飛行機に乗るんだっけ？

汐留ジャンクション付近で、急に混雑してきた。だんだんと速度が落ち、やがてノロノロ運転となって、ついにはすっかり止まってしまう。

「いやあ、参ったな」運転手は頭をポリポリと掻いた。「この辺り、渋滞は多いには多いんですが、こんなひどいのは初めてですよ」

「困っちゃうなあ、全然動きませんねえ」わたしも途方に暮れてしまう。高速道路は、スムーズに流れている時はいいけれど、こうなると身動きが取れず、かえって不便だ。

「どうやら、台場辺りで事故があったようです。そうすると、この先4、5キロはこんな状態ですねえ」

「回り道とかはなさそうですか？」

「うーん……。浜崎橋で降りて、第一京浜を走りますか。たぶん、それが1番早いでしょう」

車列は、止まったり動いたりを繰り返す。

ようやく浜崎橋ジャンクションまでたどり着き、タクシーは首都高を降りることができた。

それなのに、

「あっ、いけねえっ！」運転手はそう声を上げる。

「どうしたんです？」嫌な予感がした。

「それがね、降りる場所を間違えて、『旧市街地』に出てしまったんですよ」

進むにつれ、車窓から見える風景は、どんどんすさんでいく。まるで紛争地帯のような荒れようだ。

「この辺りで、いったい何があったんです？」わたしは運転手に尋ねた。

「ほら、今はやりの『IT企業』ってやつ。そうしたもんを軒並み建てて、シリコン・バレーみたいな町を作ろうとしたんですよ」

「へー。それがどうして、こんなゴースト・タウンに？」

「ITバブルが弾けちゃって、頓挫してしまったんですなあ。もう、どこからもお金が出ないってわけ」

なるほど、またしてもバブルか。懲りないな、我が国も。

「話はわかりましたから、引き返して羽田に向かってもらえますか」わたしは頼んだ。

けれど、運転手は残念そうに首を振るのだった。

「そうしたいんですが、この道は引き返せないんですよ。ご覧なさい、後ろを。走ってきた道路が、どんどん崩れていくじゃないですか」

振り向くと、アスファルトが次から次へと陥没していくのが見えた。

「つまり、走り続けるしかないわけで」と運転手は続ける。「たぶん、あと2日も走れば、この街を出られるはずですよ」

「ガソリンは持つんですか？」わたしは心配した。

「それは大丈夫です。ですが、他に気掛かりなことがありまして」

「何ですか？」

運転手はルーム・ミラー越しにわたしを見る。

「この街からは出られるんですが、その先に『東京砂漠』が広がっているでしょう？ その辺りでガス欠になります」

「はあ、それから？」

「救援が来るまでの間、わたしたちはそこで過ごさなくてはならないんですなあ、これが」

わたしは今度こそ頭を抱えてしまった。

助けはいつやって来るのだろう。生きているうちに、見つけ出してもらえるだろうか。

「こんなとき、銀の靴があればいいんですがねえ……」運転手が力なくぼやいた。「かかとを3回打ち鳴らして、行きたい場所を唱えると、魔法の力で飛んで帰れるっていう、あの靴ですよ」

こんな時に何を言う、わたしは胸の内ですべて返す。けれど口に出しては、

「途中にエメラルドの都があったら、ちょっと寄ってもらえますか」

そう答えた。

銀行強盗を企む

友人の桑田がにこにこしながらやってきた。

「どうしたの、何かいいことでもあった？」わたしは聞く。

「いやいや、これからあるんだ。なあ、むうにい、大金がほしくねえか？ 1千万、いや1億っ」

わたしはびっくりして、桑田の顔をまじまじと見た。前からおかしいと思っていたが、ここに来てついに頭の回路がショートしてしまったのだろうか。

「いったい、どうしたっていうのさ」熱がないか確かめようと伸ばすわたしの手を払いながら、桑田は続ける。

「よせよ、おれは正気だって。それより聞けよ。なあ、今から3丁目の銀行を襲いにいかねえか。ついさっき、現金輸送車が入っていくのを見たんだ。たんまりと金が取れるぜ」

「とんでもないことを言い出すねっ。そんなことをしたら、牢屋行きじゃん」わたしは猛反対する。

「捕まれば、だろ？ 捕まりさえしなりゃ、何も問題はない」

言われてみれば確かにそうだ。

「なら、やろう」わたしは同意した。

手ぶらというのも何だし、銃を持っていくことになった。

桑田が近所のオモチャ屋で水鉄砲を買ってくる。

「これをマジックで黒く塗るときゃ、遠目にはわからんだろう」

「素顔のまま襲撃したら、防犯カメラにまるわかりだね。目出し帽っていうんだっけ？ そういうのは持ってきてない？」わたしは聞いた。

「あいにく、そんなしゃれたもんはないなあ。でも、うちの母親の履き古しのストッキングなら、ほらっ」ポケットから、まるめたストッキングを取り出す。

わたしたちは頭からストッキングをかぶり、銀行に向かった。

黒く塗った水鉄砲を高くかかげながら、2人して銀行に押し入る。

「銀行強盗だっ。大人しくしていれば、危害は加えない。さっさと、金を出せっ！」

数人いた客達は、驚いて互いに顔を見合わせたが、ここは逆らわないほうが賢明だと判断したらしく、隅のほうに大人しく固まった。

カウンターの向こうでは、行員たちが席から立ち上がり、静かに見守っている。責任者と思われる年配の男が、部下に、「ありったけの現金を持ってくるように」と指示する。

「何もかも順調だね」わたしは桑田にささやいた。

「ああ、準備万端整えてきたからな」桑田も満足そうに答える。

行員の差し出したジュラルミン・ケースを受け取ると、パカンッと開けて中を確かめる。見たこともないほどの札束が、ぎっしりと詰め込められていた。

わたしたちはそれぞれ1ケースずつ手に取り、用心しながらゆっくりと、出口に向かう。

こんなにうまくいくのなら、もっと早く銀行強盗をしていればよかった。

誘ってくれた桑田に感謝の気持ちを伝えようと、振り返る。

「ねえ、桑田。あのさー」桑田の顔は、ストッキングのおかげで引きつっていて、出来損ないのキツネのお面そっくりだった。

「んあ、なんだ？」

わたしはぶっと吹いてしまい、はずみでジュラルミン・ケースを落とした。蓋が開いて、札束をぶちまけてしまう。

「おまっ、何やって……」桑田はわたしの顔を見るなり、やはりぷはっと笑い出し、同じくお金をまき散らしてしまった。

それを見るや、行員も客達も一斉に向かってくる。札を拾い集めている暇などなかった。

わたし達は、一目散に逃げ出した。

公園まで逃げ切り、はあはあと息をつく。

「もうちょっとだったのになあ、はあはあ……」桑田は喘ぎながら言う。

「桑田が変な顔をしてるから、はあはあ……」わたしは文句をぶつけた。

「まあ、それはお互い様だ。ストッキングは失敗だったぜ、はあはあ」

ポケットに、札らしき物が1束あることに気づく。

「しめた、残っていたよ。100万円くらいはありそう」ポケットから引っぱり出した。

「なんだ、そいつは株券じゃねえか。それも、おととい倒産した会社の」桑田ががっかりした声を漏らした。

言われてよく見れば、「〇〇電力株式会社株券」とある。

「ちえっ、こんなの紙くずじゃんか！」

わたしは株券を公園のくずかごに放り込んでやった。

週刊 夢の窓 No.7

<http://p.booklog.jp/book/86656>

著者 : mueny

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/mueny/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/86656>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/86656>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブックログ